

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第33号

2004

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成17年3月19日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

| | |
|---------|---|
| 氏名（本籍） | 李 英 姫（大韓民国） |
| 学位の種類 | 博士（社会学） |
| 学位記番号 | 甲第33号 |
| 学位授与の日付 | 平成17年3月19日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当 |
| 論文題目 | 日韓近代詩の比較文学的研究 |
| 論文審査機関 | 文学研究科委員会 |
| 論文審査委員 | 主査 大久保 典夫 文学研究科客員教授 委員 藤沼 貴 文学研究科教授 委員 中西 治 文学研究科教授 |

【論文の題目】

「日韓近代詩の比較文学的研究」

【論文の内容の要旨】

本論文は、序章（「第一節 研究目的」「第二節 先行研究」）につづいて「第一部 韓国における日本の象徴詩の影響」「第二部 韓国近代詩における喪失感覚—日本近代詩との比較」、それに「結章」「おわりに」「参考文献」「韓国の文学者一覧」が加わり、全体として四百字詰原稿用紙に換算して1,250枚の労作である。

「序章」の「第一節 研究目的」で、韓国近代詩の成立には西洋文学の直接の感化以上に、日本の近代詩や詩人などが媒介となっていた可能性が十分に考えられ、そうした日本近代詩の展開が、韓国の詩に具体的にどのように影響したのかを、比較文学的な視点を考慮に入れながら追究したい、と述べている。

「第二節 先行研究」では、韓国文学史上で近代詩をもたらしたのは日本詩壇に触れた韓国人日本留学生たちだったが、日本帝国主義により強制的に移植させられた文化という反発があって、詩分野での日韓比較文学はあまり進んでいない。本論文は、まだ未開拓分野ともいえる日韓文学研究に挑戦したものだという。

「第一部」の「第一章 韓国における近代詩の誕生」は、「第一節 日本から移入された唱歌の流行」から始まり、韓国文学史上で文字どおり近代詩の名に値する作品が現われたのは20世紀初頭からだ、と述べている。

「第三節 韓国人日本留学生のもたらした日本近代詩」では、韓国文学史における最初の同人誌「創造」（1919年2月創刊）について触れ、当時日本に留学していた^{キムトンイン}金東仁、^{チュヨハン}朱耀翰・^{チョンヨンテク}田栄澤・^{キムファン}金換・^{チェソンマン}崔承萬の五人によって刊行されたという。1910年代の代表的詩人であった^{キムオク}金億・^{ファンソグ}黄錫禹のほか「創造」同人の一人であった朱耀翰によって「創造」誌上に島崎藤村以下北原白秋まで10人の日本近代詩24編が「日本近代詩抄」として翻訳紹介される。ほかにも、韓国近代詩運動に寄与した「泰西文芸新報」「廢墟」「薔薇村」「白潮」などの文学誌活動の功績は大きい。

「第二章 象徴詩の輸入・紹介の動機」の冒頭で、海外詩受容の根本動機の一つは、韓国詩においての美学ないし芸術性の追究が、唱歌や新体詩の次元からの脱却となり、詩の近代化＝西欧化という先入観が強く働いた。これがすばらしい詩を作る美学の根拠を西

欧詩や詩論に求めたという。

「第二節 『泰西文芸新報』の役割」は、1910年代の中期から始まった海外近代詩の輸入・受容が10年代の末ごろには本格的な流れになり、その具体的な役割を果たしたのが「泰西文芸新報」だった。ここでは、西欧文学の輸入・紹介を目的として発刊された「泰西文芸新報」での海外近代詩の紹介、とりわけ象徴主義のそれについて述べている。

つづく「第三節 本格的な海外詩の受容の段階的理解」で、1918年から20年代初頭にかけての海外詩輸入・受容の担当者は「創造」と「廃墟」の同人たちであったこと。その紹介・受容について、たとえば朱耀翰によるランボーの詩「Sensation」の紹介は、永井荷風の『珊瑚集』の重訳である痕跡が強いことを実証的に論じている。ほかに日本人の手になる訳詩集として、上田敏『海潮音』、川路柳江『ヴェルレーヌ詩集』、堀口大学『月下の一群』について触れている。

「第三章 仲介者」の「第一節」では、黄錫禹の先駆性とその限界について書いている。黄錫禹の象徴派輸入、紹介が本格化したのは「日本詩壇の二大傾向」（「廃墟」創刊号）を通じてだが、ここで黄錫禹は日本詩壇の二つの傾向を論ずるかわりに、ただ象徴派の業績を検討するだけに止まった。つづいて象徴主義の理論の紹介を試み、象徴派詩人の作品が絶対多数を占める詞華集『懊悩の舞踏』（1921）を出版した金億の足跡について書いている。

「第四章 日本詩壇における象徴主義観」では、「第一節」で訳詩集『海潮音』（1905）を出版し、象徴についての解義をその序文に載せた上田敏を論じ、「第二節」で『春鳥集』（1905）の自序で象徴の提唱を語った蒲原有明について書いている。つづいて三木露風の象徴主義の定義、岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』（1913）の影響について述べ、萩原朔太郎の詩論「象徴の本質」（1928）を論じ、「第六節」で、朔太郎のあとをうけ、近代詩を現代詩へと変容させた最大の詩人と論者のいう西脇順三郎の「象徴とはメタフォール」（隠喩）説について解説する。

「第五章 韓国の象徴詩」は「第一節 初期の象徴詩」にはじまり、「第二節」で「頹廢的な象徴詩」について論じている。たとえば論者は、朴鐘和パクジョンファの「追われる人の歌」（1920）について、この詩は政治的に敗北し、経済的には滅亡、文化的にも追放されてしまった民族の暗い現実を詠嘆した詩で、この時代の知識人は黄昏たそがれの人々で、黄昏と闇にくらしている洞窟の中ですむ人間たちに悲観や失望、自嘲と自暴自棄は当然のことだろう、という。

「第六章 猫を題材にした象徴詩—韓国と日本の比較」が独自の着想でおもしろい。

韓国の近代詩で猫が詩の題材となった最初のものは^{ファンソグ}黄錫禹の「碧毛の猫」。韓国では、猫というのは恩知らずな魔物として、または人間に復讐する妖怪として伝説、説話などに書かれてきた。こうしたイメージをもつ猫が詩の題材として使われたのは、やはり象徴主義の影響で、日本留学の経験があり、積極的に象徴詩を韓国へ紹介した黄錫禹が初めて猫の詩を試みた。

黄錫禹は、猫の魔性と怪奇性を強調するとともに、さらに進んで、近代人の自我や孤独、憂鬱、異常心理などに結びつけるかたちで猫を彼の詩に導入した。また、超越的世界を象徴する猫を通し作者自身の苦悩や内的葛藤を描いたとも考えられる。この詩の構造的特徴からみて、象徴詩として成功しているとはいえ象徴的手法を二つ挙げているが、詩人の自我を猫に託し、その猫が台詞を発するというところは、三木露風の「解雪」に似ているという。

「第二節 萩原朔太郎の青猫」では、詩集『青猫』のなかの詩「青猫」を引用し、青猫の語意を『定本青猫』の「自序」のなかから引いている。

『青猫』の『青』は英語の Blue を意味しているのである。すなわち『希望なき』『憂鬱なる』『疲労せる』等の語意を含む言葉として使用した。(中略)『青猫』にも現われているごとく、都会の空に映る電線の青白いスパークを大きな青猫のイメージに見ているので、当時田舎にいて詩を書いていた私が、都会への切ない郷愁を表象している」

論者はここで朔太郎の書いた短篇小説「猫町」(1935)を連想し、朔太郎の世界が第四次元の別世界となり、すべてが猫の顔の住民になってしまったように、黄錫禹の「碧毛の猫」も詩人の自我を救う「神」として描かれている点では似ているという。両者ともフランス象徴派の祖ボードレールの「猫」の影響を強く受けているのは確かだが、ボードレールの「猫」は青猫でなく、黄錫禹が韓国語では存在していない「碧毛の猫」「青い毛の猫」を詩語として初めて導入したのも萩原朔太郎の強い影響だろう。

「第四節」では、みずから「シンボリズム部隊」と自称した^{イジャンヒ}李章熙の猫を題材に使った「春は猫ならし」「猫の夢」「空家」を取り上げ分析し、ボードレールの「猫」と類似しているという。「第五節 朔太郎と李章熙における猫のイメージ」では、朔太郎詩の鑑賞がとりわけ^{すぐ}勝れている。

「第二部 韓国近代詩における喪失感覚—日本近代詩との比較」の「第一章 存在の喪失」で、論者の命名したという「喪失詩」について、三・一独立運動の失敗からくる挫折感や暗鬱な現実を喪失詩として表現、そのなかには象徴詩のみごとな特徴、とくに音楽性

を生かし韓国独得の美しい抒情詩へ昇華していった一群がある。なかでも^{キムソウォル}金素月は韓国伝統の三・四・五調（七・五調ともいわれる）を取り入れて、音楽性あふれる民謡風のリズム感をみごとに表現した。喪失詩は大衆からも大いに受け入れられ、現在に至るまで大勢の人に歌われている、という。

「第一節 ^{ハンヨンウン}韓龍雲の『二ムの沈黙』の「二ム」とは、ふつう恋人、または自分が仕える王君を意味するが、韓龍雲にあってはさらに広く憧憬するもの、わが命と思うものを指している。仏教者としての作者の「会者定離 離者定会」という詩的思惟は、出会いと別れ、別れと出会い、生と死の弁証法を含蓄し離別の悲しみを克服させている。以下、論者は「『二ムの沈黙』の音楽性」、とくに「第二節 『二ム』の歴史的考察」で多くの文献を用い克明に論述している。

「第二章 母の喪失」では、^{ホンサヨン}洪思容の「われは 王にてあり」、金素月の「ほととぎす」の丹念な解説があるが、最後の「第三節」では、^{イジャンヒ}李章熙の「青天の乳房」と萩原朔太郎の「天上縊死」との関連について問うている。「第三章 恋人の喪失」で、論者は日韓の近代恋愛詩を比較し、日本の場合は作者個人の体験としての恋愛感情を歌ったものが多いのに対し、韓国では代表的な詩人である^{キムソウォル}金素月（1903～35）にみられるように、民族的抒情に基づいた普遍的な恋愛感情の描写がいちじるしい特徴だという。すなわち、彼が活躍した20年代の初期は、1919年3月1日に起きた日本の植民地支配からの独立を叫んだ民族的抗争の失敗という暗澹たる現実が、詩人たちにも失意と挫折をもたらした時期であって、そのような絶望的な現実のなかで、金素月は韓国の伝統的な民族抒情と呼ばれる「恨」に基づいて離別・諦念の恋愛詩を続々発表し、その虚無的な現実に対する詩人の心情を歌いあげた。その代表作「つつじ」と「招魂」を解説し、その音楽性について考察する。つづいて、^{ハンヨンウン}韓龍雲の「まことでしょうか」「あなたの手紙」、^{パクヨンヒ}朴英熙の「笑顔の早瀬」、^{ピョンヨンロ}卞榮魯の「傷心賦」を紹介し、佐藤春夫と島崎藤村の恋愛詩との関連についても触れているが、何よりも目立つのは、論者による日本語訳の流麗さだろう。

「第四章 故郷の喪失」では、故郷喪失をうたった韓国の詩には、その内部に祖国喪失を連想させるものがあって、日本の望郷詩とは違う。両国の詩を比較しながら、その点を探っていきいたい、という。

「第一節 日韓近代詩における望郷の歌」で、韓国でもっとも知られている金素月の詩の特徴について、三・四・五の韓国伝統の民謡調のリズムを生かし、女性的ともいえる滑らかでやわらかな口語体を使っている。彼の詩には音楽性ととも絵画性豊富な抒情詩が多く、まるで一つのドラマを見ているような感じがする、と概説する。そして金の「燕」

と上田敏訳『海潮音』所載のオオバネル「故国」との類似点を指摘し、萩原朔太郎の「漂泊者の歌」との関連について触れている。

つづいて、旧時代の没落と近代化というテーマがより具体性をもって現われた詩として、^{イハユン}異河潤の「無縁塚」と朔太郎の名作「小出新道」を比較検討し、^{パクヨンチョル}朴龍喆の「ふるさとを恋ひて何せむ」と室生犀星の「小景異情」、^{チョンジョン}鄭芝溶の「郷愁」と薄田泣菫・三木露風の詩とを対照させて論じている。

「第二節 他国でうたう故郷の歌」の「(1) 望郷詩と植民地下の土地政策との関連」は注目すべき力作論考。「(2) 抵抗の詩人^{ユントンジュ}尹東柱の望郷詩」は満州で歌った「ふるさとの家」にはじまり「星をかぞえる夜」「たやすく書かれた詩」、(3)は^{キムトンファン}金東煥の赤星を指さして、「(4) ^{キムタツジン}金達鎮の『郷愁』」、(5) ^{イユクサ}李陸史の『絶頂』『曠野』の紹介があり、「第三節 出郷の歌」では、^{パクヨンチョル}朴龍喆の「船出」と島崎藤村「望郷」との類似性の指摘、^{イサンファ}李相和「最も悲痛な歌」と宮崎湖処子「出郷関曲」との比較、「第四節 懐郷の歌」には^{ノチョンミョン}盧天命の「鹿」と高村光太郎「ぼろぼろな駱駝」との関連、李陸史の「青葡萄」と佐藤春夫「ためいき」、その他、日本近代詩とのかかわりについての論究がある。「第五章 祖国の喪失」には、李相和の「奪われた野にも春は来るか」「慟哭」、金素月の「ねがわくばわれわれの小鋤をつかえる土地あらねば」、韓龍雲の「あなたを見ました」、鄭芝溶の「石ころ」「カフェー・フランス」についての歴史的背景の説明と民族の悲劇に対する詩人の内面の分析がある。

「第六章 抵抗詩の様相」の圧巻は、「第六節 ^{イムファ}中野重治と林和の抵抗詩」で、日本天皇制と植民地朝鮮の問題をすどく捉えて、名作「雨の降る品川駅」や「朝鮮の娘たち」を書いた中野重治と林和「雨傘さす横浜の埠頭」の比較鑑賞、関東大震災のさい朝鮮人虐殺を糾弾・告発した秋田雨雀の戯曲「骸骨の舞跳」と朔太郎の怒りの詩「近日所感」。文学世界では、支配者と被支配者という関係でなく、同じ人間としてこよなく憐憫の情を抱きそれを表現したという。この時期に交流した日韓の詩人たちの詩は、時を越えても人の心をとらえ、感動を与えている、と結んでいる。

【論文審査の要旨】

I 本論文のねらい、構成

本論文は「日韓近代詩の比較文学的研究」をテーマとし、第一部では、韓国における日本の象徴詩の影響について、第二部では、韓国近代詩における喪失の感覚について考究し

たものです。

韓国近代詩の歴史は 19 世紀初め頃からといわれています。しかし、その初期における韓国の近代詩は、前時代の詩に対する反発という形を取って出発したにすぎません。第一部の第一章では、韓国における近代詩の誕生について述べ、韓国詩が 19 世紀末ごろ日本の唱歌の移入から日本詩壇と密接に関わり近代詩へと発展していく過程について言及しました。韓国文学史上で本格的な近代詩が登場したのは 20 世紀になってからということです。

第二章と第三章では、象徴詩の移入・紹介の動機と象徴詩を受容した仲介者たちの足跡と意義について論じています。韓国は 1910 年から日本の植民地時代が始まりますが、この時期、日本に留学した学生たちが移入・紹介したのが象徴主義の詩や詩論で、とくに上田敏訳の『海潮音』（1905）永井荷風訳の『珊瑚集』（1913）などが、韓国の文壇に大きな影響を与えました。病的で暗鬱な象徴詩は、日本支配下の人びとの共感を呼び、もともと流行した文学思潮となり、本格的な近代詩の流れを築き上げます。

第二部では、「韓国近代詩における喪失の感覚」が日本近代詩との比較において述べられています。研究範囲は日韓併合（1910）から終戦（1945）までに書かれた韓国近代詩。激動の時代背景のなかで、喪失感をうたう詩が数多く書かれたといえます。1920 年代の韓国詩には、普遍的にある価値の喪失とその回復への念願が切実に形象化され、それは 30 年代、40 年代に活躍した詩人たちの詩にも多く見られる特徴です。その価値というのは、具体的には存在・母・恋人・故郷・国家などの喪失が含まれ、とくに祖国喪失の寓意性が入り交った形のものが多く見られます。それらを内容によって分類し、分析しています。

II 韓国における日本の象徴詩の影響

本論文では、第四章で、上田敏をはじめ、蒲原有明・三木露風・岩野泡鳴・萩原朔太郎・西脇順三郎など日本文壇の象徴主義観について述べ、日本の象徴詩の展開の跡を追っています。そうした流れが韓国の詩に具体的にどう影響したのかを第五章「韓国の象徴詩」、第六章「猫を題材にした象徴詩」の章で、比較文学的な視座から追究しています。

「韓国の象徴詩」は頹廢的で現実逃避の傾向があり、「洞窟」や「冥府」「屍体」「棺桶」「幽霊」に対し、郷愁的な憧憬と情熱的な愛着を持っているのがわかります。なお、現実を否定する病的幻想をもつ象徴主義の詩は、当時の時代背景とともに、その特性としては厭世的であり、絶望的であり、健康よりも病気を、昼や光明よりも夜や暗黒を好んで、死

の世界への憧憬もさかんに表現しました。

三・一独立運動の失敗による挫折感や暗鬱の現実のなかで流行していた頹廢的、懷疑的な象徴詩は、日本の場合と同じように象徴詩を受け入れる側の未熟な条件のために深い理解や十分な消化に到らず、既成の他国のものを表面だけ導入し模倣したにすぎない点もありました。そのなかで、韓国では昔から不気味な存在であった猫が題材として使われた象徴詩を、萩原朔太郎の猫の詩と対比させて論じた箇所は圧巻で、論者の着想の非凡さと言語感覚の鋭さがよく現われています。

Ⅲ 韓国近代詩における喪失の感覚

第二部第一章の「存在の喪失」では、「ニム」という言葉の概念を紀元前の高句麗時代から遡って考察しています。「ニム」とは「王様」「上司」「夫」「恋人」「臣下」などの象徴で、自分にとって最高の価値と自分の行為を発動させる動力をもっている「恋しいもの」の本質だといいます。国権喪失にともなって古来から歌われてきた「ニム」が国の象徴として詩の題材に頻繁に使われるのは、きびしい検閲から逃れるためもあったのでしょうか。

次に、植民地時代の詩で目立つのは、父または母の喪失意識で、とくに母のそれが多い。第二章で取り上げられている「われは 王にてあり」「ほととぎす」「青天の乳房」などの詩は表面だけ見れば母の喪失を悲しくうたっているようですが、人間が本能的に求める母性愛を喪失し、頼るところがなくなってしまった生への不安を語っています。その根底にはやはり国を失って彷徨っている民衆との結びつきがあり、生まれてからの苦労、苦痛、悲劇的な生への認識、民衆の悲しみの象徴がうたわれます。

つづいて、恋人の喪失、故郷の喪失を含む望郷詩が、萩原朔太郎、室生犀星、石川啄木、島崎藤村、佐藤春夫、高村光太郎、三木露風などと比較して論じられていますが、論者自身、喪失詩と命名したこれらの詩の分析、鑑賞は見事で、第六節の中野重治「雨の降る品川駅」と林和の「雨傘さす横浜の埠頭」が応答歌であるという指摘、また、関東大震災での朝鮮人虐殺について、秋田雨雀の戯曲「骸骨の舞跳」と萩原朔太郎の詩「近日所感」を取り上げ、この時期に交流した日韓の詩人たちの詩は、時を越えても人の心をとらえ、感動を与えているという結びは、最高でした。

【総括】

本論文は日韓近代詩の比較研究として、博士の称号を授与するに相当する内容の豊かさ

を^{そな}備えている。とくに論者自身の韓国詩の日本語訳には、詩の音律の理解と言語感覚の鋭
さが見事に現われていて、瞠目される。四百字詰 1,250 枚の労作で、客観的に評価しても
充分認められると確信する。以上から本論文に博士の称号を授与することを承認した。